

『金光明經』における「弁才天」の性格

長 野 禎 子

弁才天は、インド・チベット・ネパール・中国・日本に広く分布する極めてポピュラーな女神格で、今も民間信仰の対象となつてゐる。しかし乍ら、この女神の性格は多岐に亘り、それらに関する体系約跡づけは未だなされてゐない。小文は、漢訳仏典中、我国で広く流布し、且つ、弁才天について詳細な記述のある『金光明經』を取りあげ、そこでの弁才天の性格とその変遷を明らかにすることを目的とする。

二

『金光明經』の漢訳は表に示す通りであるが、この神に関して注目すべき訳出事情としては、『合部』が当時の梵本に拠つて「呪業洗浴の法」を統訳してゐること、及び義浄訳が自ら将来した新梵本によつて訳した点、が挙げられる。「弁才天」に関する性格は別表のように時代が下るにつれてこの

女神の性格・職能が拡大されていることは、直ちに看取されるが、いずれの訳にも一貫しているのは、「大智慧」を持ち、それを与える女神である点である。又、これと関連して、莊嚴な音声により「無礙の弁」を持つ女神で、名の示す通り、「弁才天」なのである。

次に、音楽・芸術の神としての性格であるが、表に掲げた「天の伎業を作す」との表現が『合部』及び義浄訳の「呪業洗浴の法」の部分に見られるのみで、『大日經』及びその經疏中にある「弁才天即妙音楽天」（大正藏一八・二九、三五、同三九・七二一、七五五）のように琵琶との関連を示唆する箇所は、『金光明經』各訳には見当らない。

「現世利益」を与え、「悪障等の除滅」となす職能は、義浄訳において最も詳細かつ豊富である。

又、日本で弁才天は「水神」としての性格が強いが、『金光明經』では、余り顕著ではない。

さて、次に問題となるのは、表の「戦闘」以下、「母神的」

性格や形貌等の記述が、特に義浄訳で詳しい点である。この八臂の戦鬪の女神の性格は、一般の弁才天の性格と結びつきにくい。この性格の依拠する所を探るには、インドでのこの女神の性格・職能とその変遷を見ておく必要がある。

三

「弁才天」或いは『大日経』等という「妙音天」は、梵語で *Sarasvati* である。リグヴェーダにあるように、元来は、水源を聖山或いは天上に発する、慈母性と浄化力を持つ聖河で、後に次第に天上の主要な神格として崇拜された女神である。『ヴァーージャサネーイ・サンヒター』（一九・一二）に、サスヴァティーは言葉（*vac*）によってインドラ神に精気をもたらし、とあるが、この女神とヴァーチュとの同一視は、ブラーフmana文献時代には既に確立されていたようである。³ 叙事詩時代に至り、ブラフマーの妻と見做されたサラスヴァティーは創造的智に関する力を持ち、学問や全ての芸術の女神となった。同時に、当時のヒンドゥー教の *śakti* 信仰の興隆に伴って、本来河の神の持つ慈母性が拡大され、豊穰・多産の母神的性格をも賦与されるに至る (Talp. 168-198)。

このことは画像にも反映されている。画像学的研究を整理すると、二臂のもの多臂のものがある。二臂の初期のもの (AD 2c) (Benarjes p. 378) は、ヴィーナー (*vinā*) を弾く

ものと、本とペンを持つものが多い。多臂のものは主として中世初期に属するが、ヴィーナーを持つ場合と持たない場合があり、持つ場合は、後方の二本が本と珠数又は本と蓮華、持たない場合は、珠数・小太鼓・蓮華で、台座に白鳥・羊或いは獅子が描かれている。六臂のものは、シヴァ神との関係から、斧か刺し棒、円輪等が追加される (*Sivastava p. 102*)。

初期インド仏教での典型的な姿はヴィーナーを弾く二臂のもので、『大日経』等では、「妙音楽天」の印「琵琶」とされており、二臂の本とペンは「智慧の神」の表象であるが、『金光明経』の各訳では、後者の性格が強い。更に、後期グプタ朝以降の四臂の像では、ヴィーナー以外に珠数と写本を持つものが多く、「音楽・芸術」の神と仏教的意味での「智慧」の神の性格の両面を具有している。タントラ密教では、三面六臂の「金剛サラスヴァティー」があり、右手に蓮華・剣、カルトリ刀、左手に頭蓋骨杯、宝、円輪を持つ。尚、チベツトやネパールのタントラ密教でも、この三面六臂の好戦的ポーズをとるものが残っている (*Getty p. 127*)。

以上の通り、インドにおいても、ブラーナ期に近づく、この女神の性格・職能が拡大され、「智慧」・音楽等の「芸術」の神としての性格の他に、好戦的性格をも帯びてくる。しかし、それでもなお、『合部』『最勝王経』における八臂、特に後者に具体的に記されている、戦鬪的八臂の弁才天のイ

化身	母神的要素	戦闘	水の神	悪障・災 變の除滅	現世利益	芸術	音声	弁辞	大智慧	金光	明經	合部金光明經	金光明最勝王經
										曇無讖訳 ○四卷本 (AD四二一—四二二)	真諦三蔵訳 ×七卷二十二品本 (AD五五二)	宝貴等・(印度三蔵) 闍耶崛多 ○八卷本二十四品集(AD五九七)	唐・義浄訳 ○十卷三十一品本(AD七〇三)
										大弁天神品	欠	第九地菩薩とする	曇訳に闍耶崛多 「呪業洗浴の法」を含む部分統訳
					世間種々の技術			同左 言語弁了、最勝語	大智慧			無礙の弁・如来の弁	
				悪星災怪・悪神・疾病・悪口闘諍 悪夢・悪神・生死の苦、を除滅	世間種々の技術 種々諸功德	諸眷属を將いて天の伎楽をなす	声微妙						諸々の技術 財宝・延年・福德増長・資身の具等
				怖畏の処恒に防護す									戰いて恒に勝つ・闘戦あるをみて心常に慍む
				△一切諸女中弁天を最も尊となす 世間諸聖中一切最も尊となす									母となり能く世間を生ず 種子及び大地となる…大地を持するに第一た り
													天女那羅延

『金光明經』における「弁才天」の性格(長野)

形貌	図象的特徴	乗物	住处	衣服
清浄（蓮華の孤く、満月、月光・七宝珠の如し） 相好端嚴	八臂（具体的記述なし） 一脚而立つ	獅子に乗る	恒に山中にあり	常に草衣
閻羅の長姉 婆蘇大夫の妹（クリシユナの父／軍神） 牧牛歡喜女（軍神）	八臂（弓・箭・刀・論・斧・長杵・鉄輪・羅索）…三戟・左右に日月の旗・孔雀の羽を以て幢旗を作る…在所常に一足をあぐ頭に聳	獅子・虎・狼・恒に圍繞す	山 山叢の深險な処・叢林・坎窟及び河辺、頻陀	青色の野蚕衣を著す…軟草を結びて以て衣とす

メージそのものは現れていない。

四

別表の「戦闘」以下の項目の記述は、『合部』では「呪薬洗浴の法」の一部（大正蔵一六・三八七）に、又、義浄訳中の一頌（大正蔵一六・四三七）に、それぞれ記されている。

この頌の中で、弁才天は時に「天女那羅延」、「閻羅之長姉」、時に「婆蘇大天女」、「牧牛歡喜女」として姿を現わし、「於世界中得自在」、「為母能生於世間」、か又は「能為種子及大地」、満月、蓮華の如し容儀を具有すると共に、「於軍陣処戦恒勝」、「常以八臂自在莊嚴、各持弓箭刀稍斧長杵鉄輪并羅網索」或は、「執三戟……左右恒持日月旗」

等の神で、母神的性格と同時に戦闘的性格をも併せ持つ「和忍及暴悪」なる女神となっている。

義浄訳のこの頌の箇所は、大筋において、『マハーバーラタ』(vol. IV-6)中のユディシュネティラがヴィラータの町に入る時に「ドゥルガー」を讃えた歌とほぼ一致する。この讃歌は『マハーバーラタ』が体裁を整えた時代以降の挿入と言われる。この中で、ドゥルガー女神は、Narayanaの妃、Vasudevaの妹、Krisnaと同等の者で、宇宙の至上女神、自在神、智・成功・出産・豊穰の女神、人々を苦から救う神であると同時に、戦いにおいて勝利を与える神、水牛の魔神を殺す勇猛な女神と讃えられる。時に四面四臂、時に八臂で、弓・箭・鉄輪等の武器を持ち、聖山ヒマヴァッドを中心に各所に住む。このような女神ドゥルガーは大叙事詩時代を経て、プラーナ時代に至ると、ヒンドゥー教の大母神統合の中心的女神となり、その神格の一部に、勇猛・戦闘的側面を表わす。義浄訳の頌の中の弁才天は、実は、このドゥルガー女神の差し換えなのである。

以上の考察から、インドにおけるサラスヴァティーの性格の拡張と変遷を反映して、『金光明経』各訳において、「智慧・弁舌」の女神は「弁才天」となり、後代、当時の大母神信仰の興隆と共に、『最勝王経』中の弁才天は、ドゥルガーの聖母的性格と同時に、戦闘的性格をも賦与されて、護法の

『金光明経』における「弁才天」の性格(長野)

ために戦う八臂の「大弁才天女」となった、と結論される。

- 1 テメントに関しては Gordon, *Indo-Tibetan Literature, Rome, 1968*, pp. 72, 88; Getty, *The Gods of Northern Buddhism*, Oxford, 1928, pp. 127-8.
- 2 Lal, *Female Deities in Hindu Mythology and Ritual*, Pune, 1980, pp. 183; Bhattacharyya, *The Indian Mother Goddess*, Manohar, 1977, pp. 101.
- 3 Benerjia, *The Development of Hindu Iconography*, Delhi, pp. 376-380; Sivastava, *Iconography of Sakti*, Varanasi, pp. 96-102.
- 4 Bhattacharyya, B., *The Indian Buddhist Iconography*, Calcutta, 1968, pp. 351-2.
- 5 Hopkins, *The Great Epic of India*, N. Y., 1901, pp. 382. (キールワード) 弁才天、『金光明経』ドゥルガー

(大阪外国語大学講師)

新刊紹介

村上真完・及川真介著

『仏のことば註(三)』

——パラマッタジョーテイカー——』

菊版・八六四頁・定価一九〇〇円
春秋社・昭和六十三年一月三十日刊